

7 février 2009



#I27 Paris et les soeurs Bonnaire

パリ専門の編集チーム、プレス・パリについて、編集長の竹内和司さんへのインタビュー。フランス語トピックは女優で映画監督のサンドリーヌ・ボネールさんに彼女のドキュメンタリーについてうかがいました。レッスンは彼女のコメントからお送りします

☆パーソナリティ

ボブ & ちえ

☆今週のゲスト

竹内和司さん
プレスパリ 編集長

Sandrine Bonnaire さん
actrice et , réalisatrice

Générique et intro

Le 7 février 2009, numéro cent vingt-sept de chocolat, magazine bilingue français – japonais.

Kazushi Takeuchi nous parle de son agence, Paris Presse.

Sandrine Bonnaire, elle, nous parle de son film, un documentaire sur sa soeur.

「竹内和司さん...」

パリのガイドブックのお話です。どんなガイドブックを作りたいのでしょうか。

Kazushi veut créer un guide de Paris. Non pas un guide qui présente les lieux célèbres comme le Musée du Louvre ou Versailles, mais un guide qui montre Paris au quotidien. Un guide qui sera écrit par une équipe de Japonais qui habitent à Paris.

覚えよう petit à petit♪

heureusement que ...

幸いにも・・・

infilmable

映画にならない

recul

(時間・空間的)隔たり、間(ま)

de l'ordre du constat

事実確認の次元

non pas ...

・・・ではありません

de la revendication

権利の要求

je m'aperçois < s'apercevoir

気づく

partout ailleurs

他のいたるところで

thème

テーマ

hélas

嘆き・悲しみ・絶望・後悔を表現する間

投詞「ああ」「悲しいかな」(発音に注意、語尾のsを発音します)

avant tout

なによりもまず

relativement

比較的

les droits de l'homme

人権

Je m'interroge < s'interroger

自問する

en tout cas

いずれにしても

à part entière

完全な権利を持った

considérer

敬意を抱く、一目置く

Sandrine Bonnaire...

Sandrine Bonnaire : J'ai eu envie de faire le film en 97, quand ma soeur était hospitalisée depuis un an. Mais, heureusement que je n'ai pas fait le film à ce moment-là, parce que, d'abord Sabine était infilmable, et puis, j'avais trop de colère, et je pense que c'est bien d'avoir fait ce film dix ans après, parce que y a... à la fois, il y a du recul, et puis c'est un film, c'est de l'ordre du constat, et non pas de la revendication.

Bob : Pour qui avez-vous fait ce film?

Sandrine : J'ai fait ce film pour, d'abord, pour sensibiliser les pouvoirs publics, en France, et, je m'aperçois finalement partout ailleurs, puisque le film voyage très bien. Je dirais "malheureusement", puisque le thème est universel, hélas! Donc, j'ai fait ce film pour ces raisons-là, c'est à dire, sensibiliser les pouvoirs publics, de dire, on est dans un pays comme la France, qui est un pays relativement riche, où on parle des droits de l'homme, et on laisse, on laisse les gens dans des situations comme celle de Sabine, et de plein d'autres familles. Donc, avant tout, voilà, ça c'est ma première démarche. La seconde c'est de sensibiliser les gens dits "normaux". Je dis "dit", parce que où est la normalité? Quelle est la frontière entre ce qui est normal et ce qui ne l'est pas? Je m'interroge parfois. Et voilà! C'est de dire aux gens, si on s'intéresse aux personnes handicapées mentales, on peut s'apercevoir, si on les regarde un petit peu, qu'ils sont pas si effrayants, qu'ils sont pas si ingérables, et que ce sont des gens qui ont d'autres formes d'expressions, mais qui, en tout cas, ont les mêmes sentiments que nous et c'est à nous de faire la démarche de pas les rejeter quand on les voit, parce que ce sont des personnes à part entière, et c'est important de les considérer.

petite leçon: ぶんぼう一口メモ

1) フランス語の基本

☆複合過去と半過去について

複合過去と半過去の区別がよくわからないというご意見をよくうかがいます。このわかりにくさは「複合過去」とか「半過去」とかいうような文法用語のわかりにくさとも関係があるような気がします。複合過去という語は、時制の形態、つまり助動詞と過去分詞という二つの要素から成り立つことで(複合時制とも)、名付けられています。

対して、半過去は、動詞の持つ意味から名付けられています。「半」という訳語は、フランス語の **“imparfait”** 「未完の」を日本語に当てたものと思われます。つまり、ある過去の時点で、完了せず、持続している、ということです。

ここで提案です。このような難解な文法用語で過去時制を考えず、思い切ってこの二つの過去を「点過去」と「線過去」と呼んでみたらどうでしょう。点過去は一回、一回完了する、時間が「点」のような過去を表わします。

J'ai eu vingt ans le mois dernier. 「先月二十歳になった」 **ai eu < avoir**

Je me suis levé à 6 heures ce matin. 「今朝6時に起きた」 **me suis levé < se lever**

サンドリーヌさんはインタビューで次のような「点過去」を使っています。

- **J'ai eu envie de faire le film en 97,** 「97年に映画を作りたいと思ったことがあります」

- **Je n'ai pas fait le film à ce moment-là,** 「その時、映画を作りませんでした」 **ai fait < faire**

- **J'ai fait ce film ...** 「この映画を作りました」

また、いわゆる複合過去とは違う、「複合形」も点過去として使っています(3行目)。

- **je pense que c'est bien d'avoir fait ce film dix ans après,** 「この映画を10年後に製作したのは良かったと思っています」(avoir fait は不定法の完了表現で、一種の「点過去」です。 **C'est bien de** + 原形動詞は、「・・・は良い」)

対して、「線過去」は、線のように時間が持続的で、何度も繰り返されたりします。

Je regardais la télé quand elle m'a téléphoné. 「彼女が私に電話をくれたとき、テレビを見ていた」

(「テレビを見ていた」は線過去) **regardais < regarder,**

(「電話をくれた」は点過去) **a téléphoné < téléphoner**

Je me promenais le matin. 「朝、散歩をしたものでした」 **me promenais < se promener**

サンドリーヌさんは次のような「線過去」を使っています。

- **ma soeur était hospitalisée...** 「妹は入院していました」 **était < être**

- **Sabine était infilmable,** 「サビーヌ(の状態)は映画になりませんでした」

- **J'avais trop de colère,** 「腹が立ち過ぎていました」 **avais < avoir**

ですから、線過去は、過去進行形や状態を表わす過去でもあります。最後に、線過去表現の傑作、かどうかわかりませんが、シャンソンの『枯葉 **Les feuilles mortes**』から

Tu vois, je n'ai pas oublié la chanson que tu me chantais. 「ほら、私は忘れませんでした、あなたが歌ってくれた歌を」 **chantais < chanter** (「歌う」は線過去だから、「何度も何度も歌ってくれた」の意になります)

Nous vivions tous les deux ensemble, 「二人で一緒に暮らしていました」 **vivions < vivre**

Toi qui m'aimais, moi qui t'aimais 「私を愛していたあなた、あなたを愛していた私」 **aimais < aimer**

フレーズを口ずさみ、半過去、いや線過去になじんでください。なかなか味わいのある過去ですよ。ちなみに、この点過去・線過去という用語は、スペイン語の文法用語を拝借しました。

2) フランス語のコツ

2-1) 属詞を受ける中性代名詞 “le” について

人称代名詞と異なり、名詞の性数によって変化しない代名詞を中性代名詞と言います。中性代名詞は3つありますが、ここでは、“en”と“y”以外の“e”を取り上げてみます。

Travaillez, puisque vous le pouvez. 「働きなさい。働けるんですから」 (**le = travailler**)

Est-ce que vous savez qu'il est malade? --- Non, je ne le sais pas. 「彼が病気だって知っていますか」

「いいえ、知りません」 (**le = qu'il est malade**)

この二つの例文のように、中性代名詞の“le”は、直接目的語として働き、不定法(不定詞)、節などを受けます。姿が同じですから、人称代名詞の“le”と混同しないように注意して下さい。

Vous connaissez Monsieur Dupont? --- Oui, je le connais bien. 「デュポンさんをご存知ですか」 「ええ、よく知っていますよ」 (**le = Monsieur Dupont**・・・この場合の“le”は「彼を」を意味する人称代名詞)です)

さて、サンドリーヌさんの発言の中で、次のような表現がありました。

- Quelle est la frontière entre ce qui est normal et ce qui ne l'est pas? 「正常であることとそうでないことの境い目は何なの?」

ここでは、“**ce qui est normal**”と“**ce qui ne l'est pas**”が対照されています。この後者の“l”は、“le”のエリジョンした形です。これは、もちろん、定冠詞の“le”でも、人称代名詞の“le”でもありません。また、直接目的語として節や不定詞を受ける中性代名詞とも異なることは、“être”の直前にあることから明らかです。

この“le”は形容詞の **normal** を受けているのです。このように、中性代名詞の“le”は、属詞の形容詞を受けることもできるのです。と、書きましたが、もしかすると、「属詞」という文法用語は耳慣れない用語かも知れませんね。これは、

Il est grand. 「彼は背が高い」

Nous sommes contents. 「私たちは満足しています」

のような文で、主語の性質、状態を表す語(**grand, contents**)を属詞と言います。ですから、下線部の語を中性代名詞に代えることができます。

Il l'est.

Nous le sommes.

中性代名詞に代えることができるのは形容詞とは限りません。職業国籍等をあらわす、無冠詞名詞の属詞も中性代名詞にすることができます。たとえば、

Elles sont américaines? --- Oui, elles le sont. 「彼女たちはアメリカ人ですか」 「ええ、そうです」

Mon frère est médecin, je voudrais l'être aussi. 「私の兄は医者です。私も医者になりたいです」

さて、フランス語中もっとも用いられる単語“le”または“l”についてまとめましょう。

① 定冠詞 **le, la, les** の“le” (例: **le livre** 「本」)

② 人称代名詞の直接目的補語 **me, te, le, la, nous, vous, les** の“le” (例: **Je le respecte.** 「私は彼を尊敬しています」)

③ 中性代名詞の“le”

(i) 直接目的語として用いられる例: **Elle est déjà partie! Je ne le savais pas.** 「彼女は行ってしまったんですって! 知りませんでした」

(ii) 属詞として用いられる例: **Si ma femme est heureuse, je le suis aussi.** 「妻が幸せなら、私も幸せです」

2-2) 強調を表わす副詞 “si” について

- on peut s'apercevoir, si on les regarde un petit peu, qu'ils sont pas si effrayants, qu'ils sont pas si ingérables, 「彼らをちょっと見れば、彼らがそんな怖くはないし、そんなに手が焼けるわけではないことに気づくはずです」

サンドリーヌさんはインタビューでこのように言っています。ここで二度用いられている“**si**”は、もちろん「もしも」の意味の“**si**”ではありません。これは強調を表わす“**si**”といいます。ここでは、否定文中で用いられていますので、「それほど」とか「そんなに」と訳されますが、肯定文ならまさに「強調」の意味です。

Tout le monde la regarde. --- C'est normal, elle est si belle! 「みんな彼女を見てるぜ」「当たり前だよ。あんなに美人なんだもの」

Tu marches si vite que je ne peux pas te suivre. 「君がひどくはやく歩くので、僕はついていけないよ」(si ... que ... の構文「とても・・・なので・・・」)

“**si**”についてもまとめましょう。

- ① 否定疑問に対する肯定の返事: **Tu ne manges pas de pain? --- Si, j'en mange.** 「パンを食べないの」「いえ、食べますよ」
- ② 強調の副詞: **Ne parlez pas si vite.** 「そんな早口でしゃべらないでください」
- ③ 条件・仮定を表わす接続詞:
 - (i) **S'il fait beau demain, nous sortirons.** 「明日晴れたら、外出しましょう」
 - (ii) **Si j'étais toi, je ne dirais pas ça comme ça.** 「僕だったら、そんなこと言わないだろう」
- ④ 間接疑問文を導く: **Je lui ai demandé si elle m'aimait.** 「私は彼女に自分を愛しているかどうか尋ねた」

テーマ解説

今回登場いただいた、サンドリーヌ・ボネール **Sandrine Bonnaire** さんといえば、ジャック・リヴェット **Jacques Rivette** 監督の映画『ジャンヌ/愛と自由の天使、ジャンヌ/薔薇の十字架 **Jeanne la Pucelle**』(1994)でジャンヌ・ダルクを演じ、パトリス・ルコント **Patrice Leconte** 監督の『仕立て屋の恋 **Monsieur Hire**』(1989)で、イール氏の向かいのアパートに住む妖艶な隣人を演じた大女優です。ご覧になられた方も多いのではないのでしょうか。

サンドリーヌさんは、1967年オーヴェルニュ地方のガナで生まれ、16歳で映画デビューをはたしました。以来、さまざまな映画に出演し、賞を獲得します。筆者個人としては、アニエス・ヴァルダ **Agnès Varda** 監督の『冬の旅 **Sans toi ni loi**』(1985)で、主役を演じたその演技力と個性的な存在感に深い感銘を受けたのを覚えています(この作品で主演女優賞のセザール賞 **César de la meilleure actrice**を受賞しました)。驚くべきことに、あの時彼女はまだ二十歳にもなっていなかったのです(最年少の受賞だったそうです)。

彼女は11人きょうだいの7番目です。インタビューにあります、年子の妹サビーヌさんは、自閉症を患い、病院で入院生活をしていました。この度のドキュメント映画『彼女の名はサビーヌ **Elle s'appelle Sabine**』は、そんな環境から作られました(2007年、第60回カンヌ国際映画祭批評家/監督週間部門 国際批評家連盟賞)。サンドリーヌさんに映画監督の経歴が付け加えられたのです。フランスで公開されて話題となりましたが、日本ではどうでしょうか。サンドリーヌさんがおっしゃるように、精神的障害者とその周辺の問題は、きわめて普遍的 **universel**です。必ずや、国境を越えて、日本での反響も期待できるでしょう(映画の日本公開は、今年二月、渋谷アップリンク他にて)。